

学校だより

情報化社会を生き抜く力を育む

スマホの使い方を考える会の取り組みを通して

駅前広場のイルミネーションが行きかう人の心を和ませる頃となりました。残りわずかな令和元年が穏やかな幕を閉じることと、来るべきオリンピック・イヤーが明るい年となることを願っています。過日は、学校評価のご協力ありがとうございました。頂いたご意見等は謙虚に受け止め、次年度の教育活動に生かしていきたいと思っています。

さて、12月の第2土曜日は、生徒会主催の「第2回スマホの使い方を考える集会」と「情報モラル教室」が行われました。今年度、本校は、県教委の指定を受けて「生徒自身による『私たちのネット利用ルール』づくり」の取り組みを行っています。集会は、スマホの使い方を生徒が自分たちの目線で考えることを通して、自分たちの生活を自分たちで正していくことを目指すという目的で行われました。7月の集会で決定した①学業を優先しよう ②悪口や不確かな情報を書き込まない ③直接、会話をすることのよさを大切にしよう の3点を踏まえて、生活・安全・保健の各委員会から基本的なマナー ①くるりんぱっ！（思ったことをすぐに書き込まない）②No！ながらスマホ（自分の命、自分で守ろう）③時間を減らして健康UP！（スマホ管理も健康管理の1つ）の3点が具体的な事例を交えて提案されました。スマホ等の問題は、それを与えた保護者や家庭の責任であることは常に言い続けてきたことであり、現在もその考えは変わりません。またIT社会が進行する中で、スマホ等の弊害に振り回されず、生涯にわたって健康で安全な生活を送るためには、使い方を考え、賢い大人、消費者になることは必須のことと思います。今回の集会で、生徒の皆さんは、スマホ、イコール、マイナスという捉え方ではなく、命を守るということ、健康な体を維持することに着眼したことは、上手な使い方の一歩として素晴らしい提案だったと思います。そして、スマホ等の何が悪なのか、いけないのかということを考え、提案したことを実践に生かすことは、同時に自分たちの生活を見直すことにつながります。数年後にはキャッ



シュレスが当たり前の時代となり、スマホ等のIT機器もさらに進化していくでしょう。人が作った道具に人が振り回されることなく、何が本物であり本質であるのか、真実を見極める判断力は今後ますます求められていくことと思います。広い社会から見ると入間野中生の行ったことは、小さな一歩かもしれませんが、中学校時代に大きな課題に取り組んだことに誇りをもってこれからの大人社会を歩いてほしいと思っています。

埼玉県骨髄バンク推進連絡会
第28回「いのちを考える」
読書感想文コンクール
埼玉新聞社賞 受賞作品

今年度も人権の標語、税の作文や標語をはじめ、多くの生徒が作品を応募し、受賞しました。今回は、1年1組 宮崎志織さんの作品を紹介します。



人間ダメなところなんてない

狭山市立入間野中学校一年

宮崎 志織

「病気になってよかった」

彼女の言葉を聞いたとき、ページをめくる手が止まった。

「何で、ガンになったんだよ。いいわけないじゃん。」と心の中で私はさげんだ。

私は、ガンになったことがない。風邪をひいて熱を出したことぐらいしかない。それでもあの時はつらかった。熱だけでもかなり大変なのに、ガンはどうなってしまうのか。正直いえば、この本を手にする前まで、見当もつかなかった。「ガンとたたかう」ということが、どういうことなのか。

けれども、読み進めていくうちに、自分が想像しているよりもはるかに辛く、深い悲しみをせおう病気だと分かった。悲しみが胸にせまってきた。

脳幹部グリーンマで苦しんでいる西田英史さん十七歳、急性リンパ性白血病で苦しんでいる

工藤育ちゃん二歳、骨膜肉腫で苦しんでいる佐藤卓也さん十五歳ほか、七人の命。

彼らはみな、小児ガンとたたかう者たちだ。七人に、それぞれの生き方があった。中でも瀬尾日東美さんの生き方に心を洗われた。

瀬尾さんは、生後八か月で神経芽細胞腫の診断を受けた。腫瘍が脊髄を圧迫していたため、背骨が曲がり、小学六年生の頃にはこぶのようになってしまうた。

「一度でいいから薬や注射に頼らずに生きていける体になってみたい。」たくさんの治療を繰り返す中、病院ぎらいの瀬尾さんは毎日、そう願っていた。

小学校六年の時の自分はどうかだったろうと今、振り返る。自由で楽しい日々。みんなで修学旅行に行ったり、友達と遊んだり、音楽を聞いたり、歌ったり。私と瀬尾さんは、対照的な生活を送っていた。もつとできることがあったはずなのに、なぜやらなかったのだろうかと思うこともある。今、後悔している。

けれども瀬尾さんは、内藤先生と言う医師との出会いで、気持ちが一変する。

「まるで暗闇から太陽が昇ってくるようだ」と言う表現が印象的だ。あれほど病院嫌いだつた瀬尾さんが、医師とのコミュニケーションで心に変化が現れる。

「人はこんなにも変わるんだ」と、衝撃を受けた。

瀬尾さんは入院生活の最後、ついに自分の病気を前向きに受け入れた。辛い気持ちは彼女を支えるすべての人への感謝の気持ちへと変わった。

私は今、彼女を心から尊敬する。ガンと言う恐ろしい病気と正面から向き合い、ここまでのことを考えられるようになった彼女に、何か伝えたいけれど、言葉が見つからない。でも、こんなことぐらいは言える。

「私もあなたのようなすてきな人になりたいです。」と、どんなに苦しいときも、感謝の気持ちを持って闘病生活を続けてきた瀬尾さんを思いながら、私自身を思う。

「今の自分、情けないな。」と。

すぐ人と比べ、少しのことで喜んだり、落ち込んだり。すぐむきになるダメな自分。こんな自分に彼女は教えてくれた。

「生きることに意味を見つめることが、大事ななんだ」と。

今、どんなに元気でも、もしかしたら明日死ぬかもしれない。そんな世の中だ。明日死んでも「やっておけばよかったな。」と、後悔しないよう、今日に意味を見つげながら生きていきたい。少しでも、苦しんでいる人の力になりたい。

その思いがふくらみ、私は消防署の救急救命の講習を受けた。緊急時の応急手当や人のそばで見守る大切さを学んだ。ガンについて知らなかった私も、今は心を寄せることぐらいはできる。そして今、「もうだめだ」とあきらめかけている人に言っておきたい。「人間はダメなところなんてない」と。